

平成二十五年 六月三〇日発行
三重大学 日本語学文学第二四号 抜刷

篝火と蛩

―薄雲卷末の一節から―

本
廣
陽
子

篝火と蛩

— 薄雲卷末の一節から —

はじめに

いさりせし影わすられぬ篝火は身のうき舟やしたひきにけん

薄雲卷の最後の場面にあられるこの歌は、細流抄に「古来称美の哥也」と賞賛された明石の君の歌である。薄雲卷は、光源氏が、明石の姫君を紫の上の養女にと望み、明石の君が苦悩する場面から始まる。悩んだ末、明石の君は姫君を手放すことを決意し、彼女の住む大堰の邸宅は深い悲しみに閉ざされることになる。その後、藤壺は逝去し、冷泉帝が自分の出生の秘密を知るなど、重大な出来事がいくつも続いたあと、この巻は、ふたたび光源氏と明石の君の対面の場面で静かに締めくくられる。

明石の姫君を紫上に渡さざるをえず、また、光源氏のたびたびの大堰への訪問を望むこともできず、かといって、源氏の勧めに従って二条東院に移り、源氏の妻たちに混じっていいかげんな扱いを受けるのも耐えられない。このような深い物思いを抱えながら、寂しく大堰で暮らしている明石の君が、源氏に詠

篝火と蛩

本 廣 陽 子

みかけた右の歌は、読者に深い感銘を与えたに違いない。本稿では、この和歌とそれが詠まれた場面を取り上げ、そこに見られる源氏物語の場面描写の一方方法を考察したい。

一、「いさりせし」の歌

当該歌を含む場面を見てみよう。

山里の人も、いかになど、絶えず思しやれど、ところせさのみまさる御身にて、渡りたまふこといと難し。世の中をあぢきなくうしと思ひ知る気色、などかさしも思ふべき、心やすく立ち出でて、おほぞうの住まひはせじと思へるを、おほけなし、とは思すものから、いとほしくて、例の不断の御念仏にことつけて渡りたまへり。

住み馴るるままに、いと心すげなる所のさまに、いと深からざらむことにてだにあはれ添ひぬべし。まして見たてまつるにつけても、つらかりける御契りのさすが

に浅からぬを思ふに、なかなかにて慰めがたき気色なれば、こしらへかねたまふ。いと木繁き中より、篝火どもの影の、遣水の螢に見えまがふもをかし。「かかる住まひにしほじまざらましかば、めづらかにおぼえまし」とのたまふに、

「いさりせし影わすられぬ篝火は身のうき舟やしたひきにけん

思ひこそまがへられはべれ」と聞こゆれば、

「あさかぬしたの思ひをしらねばやなほ篝火の影はさわげる

誰うきもの」とおし返し恨みたまへる。おほかたもの静かに思さるころなれば、尊きことどもに御心とまりて、例よりは日ごろ経たまふにや、すこし思ひ紛れけむとぞ。

〔薄雲〕二一四六五、四六六頁

まずは、明石の君の和歌を解釈することからはじめたい。

「いさり」とは、漁をすることであり、「影」は、ここでは、その直前の「篝火どもの影の」の「影」と同様、光を意味する。「いさりせし影」とは、明石の君が明石の浦で見た漁火のことである。また、「篝火」は、大堰川の鵜飼舟の篝火と考えられる。

この、「篝火」を鵜飼舟の篝火とすることについては、少し注意を要する。

現代の注釈書ではおおむね篝火を鵜飼の篝火とするが、古注

釈においては必ずしもそうではなかった。『細流抄』が、和歌に「明石にての物思ひも大井にての心つくしもおなしきに又鵜ふねのかゝりをあまのいさりに思ひよそへてうき事のはなれぬ心进行いへり」という注をつける一方で、直前の「篝火」の語には、「八月のすゑなればしせんの篝火なともあるへし」と注しているように、古くは「篝火」が何を指すのか解釈が揺れていた。『岷江入楚』でも、「篝火」について、「私大井川鵜舟の篝八月までも有へき歟 又何のかゝりにても有へし」と記し、季節との齟齬を取り上げている^③。

この場面の季節は、直前の斎宮の女御の里下がりの場面で、「秋ごろ」（二一四五八頁）とあるところから、引き続き秋であると考えられる。そのため、夏の風物詩である鵜飼が、果たしてこの時期行われていたのかという疑問が生じる。しかし、それについては、『集成』（略称は注2を参照。以下同じ）と『新大系』で、「松風」の巻に桂殿での饗宴で秋でありながら鵜飼が登場していることが指摘されている。諸注釈が示すように、鵜飼舟の篝火と考えて問題ないであろう。

上の句の「いさりせしかげ忘れぬ篝火は」の解釈については、諸注釈ではいずれも、「忘れぬ」の主語を和歌の作者である明石の君ととり、「明石の浦の漁火を思い出させるあの篝火は」の意とする。『集成』が「明石の浦での暮らしを思い出させる篝火」と訳出するように、「いさりせし」は、単に漁をしたこ

とを指すのではなく、明石の浦での生活を象徴的に表現している。

下の句に関しては、諸注釈に多少の解釈の違いがある。

『評釈』をのぞいて、「身のうき舟」を、「したひ来にけん」の主語としており、あの「篝火」は「身のうき舟」が我が身・明石の君を慕ってきたのだらうかという意味となる。これ自体には異論はない。

その場合、「身のうき舟」の言葉を巡って、これまでの研究では二つの見解に分かれている。

一つは、「身のうき舟」の意味を、主に「身の憂き」と考え、「浮舟」は「憂き」という事を言う代わりに、漁火の縁で舟を出したまでの歌言葉とする解釈である。これは、『全書』、『対校』、『集成』が支持し、「舟」を積極的には訳に反映させない。例えば、『対校』は「「うき舟」は「憂き」といふ事をいふ代りに漁火の縁で舟を出したまでの歌言葉である」と注をつける。また、『集成』は、「明石の浦での暮らしを思い出させる篝火がここに見えますのは、あの浦での悲しい思いが、ここまで私を追って来たのでしょうか。明石でもここでも悲しい思いをするばかりです」と訳し、「浮舟」（水の上に漂う舟）は、「憂き」を言い掛けて「いさり」の縁で置かれた歌語」という頭注を付ける。

もう一つは、「身のうき舟」を、「浮舟」と「身の憂き」と二つが掛けられている言葉として捉える解釈である。身の憂きが明石から我が身を追ってきたことと、明石の浦のいさり舟（浮舟）が大堰までやってきたことの二通りの意味を重ねる。この解釈

をするのは、『新解』、『大系』、『全集』、『新大系』、『新編全集』、『注釈』、『基礎知識』である。例として『全集』の訳を挙げると、「明石の浦で漁をした折の火影を思い起こさせるこの篝火は、浮舟がここまで後を追ってきたのでしょうか―あのころのつらい思いが、ここまでついて回るのでしようか」とある。『新大系』は、「明石の浦を思い起こさせる漁火がここで見えるのは、わが身の憂さを思い知らせる浮舟がここまで追っかけてきたのだらうか」と、「浮舟」を我が身の憂さを思い知らせるものとして捉える。

筆者は、「浮舟」の意味をも込めている後者の説を取りたい。この歌のおもしろさの一つは、身の憂さを「身のうき舟」と表現したところにある。「身のうき舟」と表現することによって、火をともした舟がやってくるイメージと我が身の憂さがやってくるイメージの二つが重ね合わされる。

憂さが自分のところにやってくるという発想の和歌は、源氏物語や紫式部集にも、また、それ以前にも見ることができ。

- ① いかならん巖の中に住まばかは世の憂きことの聞こえござらむ（古今集・卷十八・雑歌下・九五二）
- ② 滝つ瀬の渦巻ごとにとめ来れど猶尋ね来る世の憂きめ哉（後撰集・卷一七・雑三・一二三九）
- ③ 鳥の音もきこえぬ山と思ひしを世のうきことは尋ね来にけり（源氏物語・「総角」五―二三九頁）

④身のうさはこころのうちにしたひきていまこのへぞおもひみだるる(紫式部集・五六)はじめてうちわたりをみるにも、ものあはれなれば)

これらの和歌の「うきこと」は俗世の憂き、人の世の憂きを指しているが、当該歌の「身のうき」は、源氏と知り合ったが故に感じざるをえない、恋ゆえのつらさである。源氏が明石にいた時も、明石の君のもとへの訪れは途絶えがちで、明石の君はつらい思いを味わわなければならなかった。

女、思ひもしるきに、今ぞまことに身も投げつべき心地する。行く末短げなる親ばかりを頼もしきものにて、何時の世に人並々になるべき身とは思はざりしかど、ただそこはかとなくて過ぐしつる年月は、何ごとをか心をも悩ましけむ、かういみじうもの思はしき世にこそありけれど、かねて推しはかり思ひしよりもよろづに悲しけれど、なだらかにもてなして、憎からぬさまに見えたてまつる。「明石」二二六〇(二六一頁)

源氏の君と出会ってしまわなければ、老い先短い親だけを頼りになんということもなく生きてきたものを、男女の仲というのはこんなに苦勞の多いものだったのかと、明石の君は、源氏と出会って自分の想像していた以上の悲しみを経験する。加え

て、源氏が京へ去ってからは、どんなに寂しく心細かったかは言うまでもない。そして、京へのぼつても、源氏は頻繁に訪れず、姫君は紫の上のもとに引き取られ、明石の君から物思いが消えることはないのである。

さらに、浮舟は、水に浮かんで漂う小舟として詠まれる。

⑤わたつうみの波にまどへる浮舟は寄る岸なくてわびしからん(藤六集・三三・輔相)

⑥橘の小島の色はかはらじをこのうき舟ぞゆくへ知られぬ(源氏物語・「浮舟」六一―五一頁)

「うき舟」によって、当該歌に頼りないイメージを添加し、明石の君の心細さをも象徴させているとも考えられる。

木々の間から見える篝火を明石の浦で見た漁火と重ねると同時に、今のつらさを明石にいた当時のつらさに重ねる。今がつらいのは、明石時代のつらさが我が身をしたってやってきたからなのか。

明石の君の気持ちは、歌のあとの「思ひこそまがへられはべれ」という言葉によって、よりはつきりと示される。「思ひ」の「ひ」には、「火」が掛けられており、漁火と篝火が見間違えうなると同様、明石での物思いも大堰での物思いも同じようなものだとも明石の君は言う。

二つの火に二つの思いをあわせ、火も思いも共に明石から我

が身を追って大堰にやってきたというイメージをこの歌に抱かせつつ、昔と変わらぬつらさを光源氏に言いかけた歌であると
言えよう。

二、漁火と篝火

「いさりせし」の歌を成り立たせているのは、大堰の篝火が
明石の浦の漁火を思い出させるものとして見えるという発想で
ある。しかし、従来、和歌において、「漁火」と「篝火」は、共
通したイメージを持つ言葉ではなかったようである。いつた
い、この二つの言葉は、歌語としてどのように把握されていた
のであろうか。

まず、「漁火」について見ていきたい。

元来、「漁火」は、次の⑦⑧⑨のように星や螢にたとえられ、
遠くに見えるものとして捉えられている。

⑦伊勢物語八七段

……やどりの方を見やれば、あまのいさり火多く見ゆるに、
かのあるじの男よむ。

晴るる夜の星か河べの螢かもわがすむかたのあまのたく
火か

とよみて、家にかへり来ぬ。(二九二頁)

⑧いさりびのくるればうかぶかげをこそあまつぼしとはいふ

篝火と螢

べかりけれ(能宣集・九四／たびまかるに、うみのほとりなる人のい
へにやどりはべりて)

⑨漁り火の浮かべる影と見えつるは波の夜照る螢なりけり

(寛和二年内裏歌合・一八・惟成)

また、次のように「漁火」は「ほ」「ほのか」を導き出す言葉
として用いられている例もある。

⑩志賀の海人の釣し灯せるいざり火のほのかに妹を見むよし

もがも(万葉集・巻第二・三二七〇)

⑪鮪まぐろつくと海人の燭せるいざり火のほにか出でなむ我が下思

ひを(万葉集・巻第一九・四二一八)

⑫漁火の夜はほのかにかくしつゝ有へば恋の下に消ぬべし

(後撰集・巻十・恋一・六八一・藤原忠国／しのびて逢ひわたり侍ける人に)

漁火は遠くに見えることから、万葉集以来「ほのかに」に続
く序詞としても用いられてきた。^⑦

このように、「星」や「螢」にたとえたり、「ほのか」を導き出
す語として用いられる「漁火」は、和歌の世界では、遠くに見
える火、ほのかに見える火として捉えられていることが分かる
のである。

それでは、源氏物語以前、「篝火」はどのように詠まれていた
のだろうか。

鵜飼の篝火は、⑬⑭のように周りや水底を明るく照らし出すものとして詠まれる。

⑬大井河浮かべる舟の篝火に小倉の山も名のみなりけり（後撰集・卷十七・雑三・一二三・業平／大井なる所にて、人々酒たうべけるついでに）

⑭篝火のかげしるれば烏羽玉のよかはのそこは水ももえけり（貫之集・一〇／六月のうかひ）

また、辺りを明るく照らし出す篝火は、恋の炎として詠まれる。篝火を恋に苦しむわが身になぞらえた例や、恋の思いに燃えることのたとえとして詠まれた例が見られる。

⑮かゞり火にあらぬわが身のなぞもかく涙の河にうきてもゆらむ（古今集・卷十一・恋一・五二九）

⑯篝火のかげとなる身のわびしきはながれて下にもゆるなりけり（古今集・卷十一・恋一・五三〇）

歌語としての「篝火」は、周囲を明るく照らしたり、恋の炎として激しく燃えたりするものとして詠まれている。そして、それらは、眼前を明るく照らし出したり、燃えている火そのものを直接に歌に詠み込んだりと、近景が描写される。同じ火でありながら、遠景を詠んだ「漁火」とは対照的なのである。

このように、漁火と篝火は、それぞれ、全く異なったイメージ

ジを持つ言葉であった。それにもかかわらず、明石の君の歌が、「いさりせし影わすられぬ篝火」と、篝火を漁火によそえているのは、それまでに見られない新しい趣向であったと言えるだろう。

三、自然描写——篝火と螢——

前節で述べたように、鵜飼の篝火と漁火は、歌言葉としては異なるイメージを持つものであるが、「いさりせし」の歌は、この二つを似たものとしてつなぎ合わせている。いかなる手法でもってこのようなことが可能になったのか。それには、直前の自然描写が深く関わってくると思われる。

いと木繁き中より、篝火どもの影の、遣水の螢に見えまがふもをかし。

「見えまがふ」は、見間違えるの意と、二つが入り乱れて区別がつかないの意の、両方が考えられる。ここでは、季節が秋であることから、螢は実際にはいないものと考え、前者の、見間違えるの意を取りたい。

さて、和歌の直前に自然描写がおかれ、その描写が和歌の状況を事前に説明する役割を果たすことは、古くから行われている。いわば、一種の詞書的存在である。

しかし、源氏物語のこの自然描写は、単なる和歌の説明や、

場面の背景を描いたのではない。篝火がちらちら見えるという情景を、「遣水の螢に見えまがふ」と、「螢」に見立てたところに意味がある。

この見立てには、『紫明抄』が伊勢物語八七段の

晴るる夜の星か河べの螢かもわがすむかたのあまのたく火かを挙げてゐるのに注目したい。

前節でも取り上げた右の伊勢物語の歌は、主人公の男が、布引の滝を見にいった帰り道、日が暮れた後自分の家の方をながめると、海人の漁火が多く見えるので詠んだ歌である。向こうに見える光は、いつたい「晴るる夜の星」なのか、それとも「河べの螢」なのかと、漁火を星や螢に見立てて、夜の海辺に浮かぶ漁火の印象的な光を表現している。

当該箇所では篝火を螢に見立てることによって、読者に、右の伊勢物語に代表される螢と漁火の見立てを思い出させる。そして読者は、鵜飼の篝火を漁火と同様の遠くにちらちら見える光としてとらえることができるのではないか。この見立ては、読者を篝火から漁火へと導く働きをしている。¹⁾

このようにして、篝火と螢の見立ては、周囲を明るく照らし出す、または激しく燃えるという篝火の主なイメージを抑え、鵜舟の篝火が木立の間からちらちら漏れる火、つまり、遠景としての篝火であるということ、そして、それが漁火と同じように見えることを、読者に違和感なく受け入れさせているのである。

そして、後に続く、光源氏の「かかる住まひにしほじまざらましかば、めづらかにおぼえまし」という言葉は、読者の理解をさらに後押しする。つまり、「かつて、明石においてこのような暮らしの苦勞に馴れていなかったなら、今、大堰のこんな景色もずいぶんめづらしく思われるでしょうに」という内容と、「しほじむ」という明石の海辺の縁で用いた言葉によって、二人が明石でくらししていたことや、大堰の邸が明石に似せて作られたことなどを思い出させるのである。

「松風」巻から記されていた大堰と明石の風情の類似、前述した「篝火」と「螢」の見立て、そして光源氏に言わせた「しほじむ」という言葉。それらが合わさり、木立の向こうの大堰川が、そこに浮かぶ鵜舟が、にわかに明石の浦にうかぶいさり舟へと姿を変えてゆくのである。そして、その篝火と漁火という二つの火は、歌の中で、明石の君の二つの思いに重ねられて、昔も今も憂きことのつきない我が身を嘆く気持ちへ集約されていく。

この「遣水の螢に見えまがふ」という表現こそ、本来異なったイメージを持つ「篝火」に「漁火」を重ねる明石の君の歌を、巧みに導き出すものとして作用しているのである。

ただし、かつての思いを「漁火」、今の思いを「篝火」とすることにさらなる意味はあるであろう。歌の詠む景色としては、鵜飼の篝火は遠景だが、しかしその思いは歌語である「篝火」が持っている本来の意味あいをもとっているはずである。つま

り「篝火」には燃えるような激しい思いが込められている。かつてを「漁火」、今を「篝火」と言い、「思ひ」は同じとは言いがた、実はかつてよりも激しく苦しい思いを明石の君が今心の内に秘めていることを、この和歌は表しているのではないだろうか。

四、静から動への転換点としての自然描写

さらに、この自然描写にはもう一つの別の重要な役割が与えられている。

場面の状況を再度確認しよう。もの寂しい大堰に住む明石の君のもとを光源氏は訪れる。明石の君は、姫君を紫の上へ渡し、ひとり寂しく沈んでいる。源氏は、いくら二条東院に来るようにさそっても応じない明石の君を、身の程知らずだとは思いうものの、いざ大堰に来てみると、明石の君とのこれまでが思い出されて、感慨は深い。

なかなかにて慰めがたき気色なれば、こしらへかねたまふ慰めようにも慰められないほど沈んだ明石の君と、それをどうすることも出来ず途方に暮れている光源氏。

その時、「いと木繁き中より、篝火どもの影の、遣水の螢に見えまがふ」という情景が二人の目に飛び込んでくるのである。この風景が契機となって、「慰めがたげ」な明石の君が歌を詠む。

そして、そのことによって、「こしらへかね」ていた源氏は、明石の君に、「あさからぬしたの思ひ」をはつきりと伝えることができるのである。

「いと木繁き中より、篝火どもの影の、遣水の螢に見えまがふもをかし」という自然描写は、この場面において、行き詰まった状況を打開するきっかけ、静から動へと変わる転換点になっているのである。

このように、自然描写が、停滞している状況のなかで登場人物を突き動かす転換点として用いられることは、源氏物語の中でも他にも見られる。例えば、同じ薄雲巻の一節を見てみたい。

二条の院の御前の桜を御覧しても、花の宴のをりなど思し出づ。「今年ばかりは」と、独りごちたまひて、人の見とがめつべければ、御念誦堂にこもりゐたまひて、日一日泣き暮らしたまふ。夕日はなやかにさして、山際の梢あらはなるに、雲の薄くわたれるが鈍色なるを、何ごとも御目とまらぬころなれど、いどものあはれにおぼさる。

入日日さす峰にたなびく薄雲はもの思ふ袖に色やまがへる

〔薄雲〕二一四四八頁 傍線、筆者

藤壺亡き後、念誦堂にこもり一日中泣き明かして暮らすという沈んだ源氏に、心を動かさせ、目を外に向けさせ、「入日さす……」という印象的な歌を詠ませることに成功しているのは、「夕

日はなやかにさして、山際の梢あらはなるに、雲の薄くわたれるが、鈍色なるを」というあまりに美しい情景描写が、止まっていた源氏の心を動かすきっかけになる装置として働いているからである。

静から動への転換点としての自然描写は、作者が、源氏物語の中で、あきらかに意図的に用いている。それは、源氏物語において自然描写に与えられた一つの役割と考えることができる。

五、後世への影響

鶺鴒の篝火を螢に見立てた表現は従来から用いられてきたものではない。和歌においても、鶺鴒の篝火と螢の組み合わせは、管見の限り、源氏以前には見あたらない。しかし、源氏物語以降には、この見立ての歌があらわれてくるのである。

⑰大井川せぜにひまなきかがり火とみゆるはすだく螢なりけり
(堀河百首・四六九・頭季)

⑱遠近のよ川にたけるかがり火と思へば沢のほたるなりけり
(散木奇歌集・三〇九／ほたるをよめる)

⑲外山すぐる螢とぞみる早瀬川くだす鶺鴒の篝火のかげ(宝
物集・三八八・季能)

⑳かがり火のほのめくかげやかはたけのはごしにまよふほたるなるらん(教長集・二八五／隔竹望螢)

篝火と螢

⑰⑱は螢を篝火に見立てたもの、⑲は逆に篝火を螢に見立てたものである。共に、鶺鴒の篝火と螢を同じように見えるものとして捉え、見立てを用いた点で、源氏物語の当該箇所と発想を同じくする。

中でも、⑰⑱の和歌に着目したい。⑰は『堀河百首』中の歌で、源俊頼と親交があつたと思われる藤原頭季の作であり、⑱は、俊頼の作である。堀河百首の歌や俊頼の和歌に、源氏物語をふまえて作られたものがあることは、寺本直彦氏、竹下豊氏や岡崎真紀子氏^⑮らによって指摘されており、これらの和歌も、源氏物語の当該箇所からその発想を取り入れて作られた可能性があるのでないだろうか。

源氏物語のこの場面は、季節が秋であることから、螢は実際には存在せず、鶺鴒の篝火を螢に見立てると解釈するが、螢も鶺鴒も夏の風物詩であることから、螢火と篝火が共に入り乱れ、どちらがどちらか区別付かなくなる様を表現した歌も詠まれている。

㉑五月やみ鶺鴒川にともすかぎり火のかずますものはほたるなりけり(詞花集・巻二・夏・七四／六条右大臣の家に歌合し侍けるに
よめる)

㉒さだめなくともすかがりとみえつるは鶺鴒ふねにまがふほたるなりけり(大皇太后宮小侍従集・四二／螢照船)

②③ 大井河くだす舟のかがり火に入江のほたるかずまさるらん（道助法親王家五十首・四一五／江螢）

②④ 暮れぬれば鵜飼のかがり数そひて光あまたに行くほたるかな（建長八年百首歌合・六百十一番左歌・二二二）

影響関係を明らかにするには今後十分な検討が必要であるが、本稿では、古歌に鵜飼の篝火と螢とともに詠み込んだ歌がないこと、源氏物語が後世の和歌に多大な影響を与えていることをふまえ、そこに、源氏物語の影響を見て取ることができる可能性を指摘して、今後の研究課題としたい。

『源氏物語』『伊勢物語』の引用は、『新編日本古典文学全集源氏物語』（小学館）による。『万葉集』『古今和歌集』『後撰和歌集』『詞花和歌集』の引用は、『新日本古典文学大系』（岩波書店）による。『寛和二年内裏歌合』の引用は、『平安朝歌合大成 増補新訂』（同朋舎出版）、それ以外の和歌の引用は、『新編国歌大観』による。

注

- (1) 伊井春樹編『内閣文庫本 細流抄』（源氏物語古注集成 第七巻）桜楓社一九八〇年 以下、『細流抄』の本文はすべてこの書による。
- (2) 篝火を鵜飼の篝火と注を付けているのは、『全書』『大系』『評釈』『全集』『集成』『新大系』『新編全集』『注釈』『基礎知識』である。なお、略語は、以下に従う。

- 『新解』…金子元臣校注『定本源氏物語新解』明治書院
- 『全書』…池田亀鑑校注『日本古典全書 源氏物語』朝日新聞社
- 『対校』…吉澤義則校注『対校源氏物語新釈』平凡社
- 『大系』…山上徳平校注『日本古典文学大系 源氏物語』岩波書店
- 『評釈』…玉上琢彌校注『源氏物語評釈』角川書店
- 『全集』…阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳『日本古典文学全集 源氏物語』小学館
- 『集成』…石田稷二・清水好子『新潮日本古典文学集成 源氏物語』新潮社
- 『新大系』…柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎校注『新日本古典文学大系 源氏物語』岩波書店
- 『新編全集』…阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『新編日本古典文学全集 源氏物語』小学館
- 『注釈』…山崎良幸・和田明美・梅野きみ子・熊谷由美子・山崎和子校注『源氏物語注釈』風間書房
- 『基礎知識』…監修・鈴木一雄／編集・三角洋一『源氏物語の鑑賞と基礎知識』至文堂
- (3) 『岷江入楚』の引用は、中野幸一編『岷江入楚』（源氏物語古注集成 第六巻 武蔵野書院、一九八四年）による。なお、古注釈に季節に対する違和感が記されていることについては、竹内正彦「大堰の篝火―薄雲―巻末の明石君―」（『源氏物語発生史論―明石一族物語の地平―』（新典社二〇〇七年）でも触れられている。
- (4) 筆者が確認した注釈書は注2で示したものである。なお、この箇所について『全書』は「あの篝火を見ますと明石で過ごした日が忘れられませんが」と訳し、『対校』は「あの篝火を見ると、明石の浦で苦しんでいた時の漁火の影も思ひ出される」と訳すが、文意の解釈は同様とみなしてよいと考える。
- (5) 『評釈』は、「いさりをしたあの光の忘れられないかがり火は、わが身の憂さを慕って追ってきたのでしょうか」と訳す。篝火Ⅱ身の浮舟とはせず、身の浮舟（我が身の憂さ）が、「したひきにけむ」の目的語になっている。

いる。

- (6) 久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』(角川書店 一九九九年) 項目「漁り」でも、「いさり火」の代表歌として⑦の伊勢物語の歌を挙げ、後代に影響を与えたとする。

- (7) 片桐洋一校注『新日本古典文学大系 後撰和歌集』の六八一「番歌脚注」また、「いさり火」が「漁火」が「ほ」「ほのか」「ほの…」を導く序詞を構成することは、注6の『歌ことば歌枕大辞典』にも指摘されている。

- (8) 『歌ことば歌枕大辞典』項目「篝火」参照。

- (9) 『源氏物語』以前に、管見の限りわずか二首ではあるが、「篝火」を遠景の火として詠んだのではないかとと思われる歌がある。

a 大空にあらぬものから川かみにほしとぞ見ゆるかがり火の影(貫之集・一五一／うかは)

b ひさかたの月のかつらのちかければほしとぞみゆるかがりびのかけ(道命阿闍梨集・二一〇／大井河にうかぶかりをみて)

これらは「篝火」を星にたとえた歌である。aは、「川かみ」の方に浮かんでいる鵜飼舟の篝火を星のようだと詠んでおり、これまで見てきた「いさり火」に近い表現と言える。特にaは貫之の歌であり、「古今和歌六帖」の「よかは」の部にも入っていることから、紫式部が「いさり火」と「篝火」の見立てを思いついた背景にはこの歌の存在があった可能性がある。

- (10) 小関清明「初期の物語に於ける自然描写に就いての一考察」高知大学研究報告 人文科学 第二号 一九五二年三月

- (11) 「篝火どもの影の、遣水の蛭に見えまがふもをかし」の表現が、伊勢物語八七段を媒介に、明石の君と光源氏の贈答歌を導き出す働きをしていること自体は、注3に挙げた竹内正彦氏の論文「大堰の篝火」「薄雲」巻末の明石君」に指摘がある。竹内氏は、明石の君が、話型を裏切るかたちで明石へ帰ることなく六条院世界にくみこまれていく過程に、この表現の背景にある伊勢物語の歌、さらには、その伊勢物語の注釈に引いてある「孫姫式」所収の基泉の歌が寄与したことを論じている。

- 竹内氏がこの表現と贈答歌に明石一族物語のゆくえを読もうとしているのに対し、本稿は、むしろ、表現そのものに着目し、源氏物語の文章がいかにして書かれたかを明らかにしようとするものである。歌語である「漁火」と「篝火」が異なるイメージを持っていることに着目し、明石の君の歌が成り立つ要因として、この「篝火どもの影の、遣水の蛭に見えまがふもをかし」の表現が置かれたことを指摘する。さらに第四節で、この表現が源氏物語において、場面を形作る上で一つの装置として効果的に働いていることを指摘し、源氏物語の描写方法の特徴の一つを明らかにするとともに、第五節ではその表現が後世の和歌に影響を与えた可能性を指摘しようとする試みである。

- (12) 「松風」巻では、大堰の邸の風情が明石に似ているということが繰り返し語られていた。

惟光朝臣、例の忍ぶる道はいつとなくいろひ仕うまつる人なれば遣はして、さるべきさまに、ここかしこの用意などせさせたまひけり。「あたりをかしうて、海づらに通ひたる所のさまになむはべりける」と聞こゆれば、さやうの住まひによしなからずはありぬべし、と思す。……これは川づらに、えもいはぬ松蔭に、何のいたはりもなく建てたる寢殿のことぞぎたるさまも、おのづから山里のあはれを見せたり。(松風 二四〇一頁)

家のさまもおもしろうて、年ごろ経つる海づらにおぼえたれば、所かへたる心地もせず。昔のこと思ひ出でられて、あはれなること多かり。……かの御形見の琴を掻き鳴らす。をりのいみじう忍びがたければ、人離れたる方にてうちとけてすこし弾くに、松風はしたなく響きあひたり。尼君もの悲しげにて寄り臥したまへるに、起きあがりて、

身をかへてひとりかへれる山里に聞きしににたる松風ぞふく御方

ふる里に見し世の友を恋ひわびてさへづることを誰かわくらん

(松風 二四〇七・四〇八頁)

なお、明石の君の住む大堰の邸が明石の海づらに似た風情であることが書かれると同時に、この邸が松蔭に建っていることにも注意したい。明石の岡辺の家でも、松や松風が描かれている。

- (13) 『源氏物語受容史論考 続編』 風間書房 一九八四年

- (14) 『堀河百首』の歌ことばと和歌史的位置 小町谷照彦・三角洋一編

『歌ことばの歴史』(笠間書院 一九九八年)所収。

- (15) 『源氏物語と源俊賴』『国語国文』第七〇巻第四号 二〇〇一年四月

〔もとひろ ようこ 本学教員〕